第８話　大映末期の高校生シリーズ

●「すがすがしい青春の和解」――『高校生番長 深夜放送』

60 年代後半から 70 年代にかけて、高校生、大学生に圧倒的な人気を誇ったメディアはテレビでなくラジオ、それも深夜放送だった。受験勉強などをしながらでも聴取できるのと、番組に対してリクエスト葉書などによる双方向性のコミュニケーションが可能なことが魅力的だった。わたしも結構熱中したものだ。

65 年スタートの文化放送「真夜中のリクエストコーナー」の成功を受け、66 年には大阪朝日放送の「ヤンリク」こと「ABC ヤングリクエスト」、67 年 TBS「パックインミュージック」、ニッポン放送「オールナイトニッポン」、大阪毎日放送「MBS ヤングタウン」、68 年名古屋東海ラジオ「ミッドナイト東海」、69 年文化放送「セイ！ヤング」と次々人気番組が開始される。

DJ 役を務めるアナウンサーやタレントは、69 年頃から「パーソナリティ」と呼ばれるようになり、土居まさる、落合恵子、みのもんた、亀渕昭信、斉藤安弘、野沢那智、白石冬美らがとりわけ人気を集めた。少年誌であるはずの「少年マガジン」が彼らの特集を組んだあたり、「あしたのジョー」に代表される少年漫画の読者層の年齢上昇で、高校生世代は深夜放送と「少年マガジン」が両立したのである。

といっても深夜放送の流れるエリアは都市部に限られており、たとえば鹿児島では民放ラジオの深夜放送はなかった。ただし深夜は電波が遠くまで届きやすくなるため、トランジスタラジオの周波数ダイヤルを一生懸命になって合わせ、都会から流れてくる放送に耳を傾けた。北朝鮮からの宣伝放送に割り込まれたりしながら。

それほど若者を惹きつけた深夜放送だが、青春映画の主たる題材に取り上げられることはほとんどなかった。その珍しいケースが、『高校生番長　深夜放送』（70 帯盛迪彦　脚・高橋二三）である。

人気番組「オールナイトミュージック」で起きた事件から話は始まる。「これから自殺する自分のために」と電話で曲をリクエストした女子高校生が妊娠を悩んで実際に自殺したことを知り、パーソナリティは衝撃を受ける。さらに、別の女子高生から集団売春グループの一員であると告白する投書が来た。気になったパーソナリティは投書に記されてあった学校名と氏名を頼りに本人を訪ねてみる。

その彼女・京子（八並映子）は自分は投書していないと言うが、この来訪で学校中に売春の噂が広まる。彼女の味方は優等生の直之（篠田三郎）だけだった。だが、高校入学前に身体を汚された過去を持つ京子は直之にも心を開かない。自分の名前を騙った投書の主

を探そうと単独で動き、なりゆきで不良グループの番長（小野川公三郎）に身を任せてしまう。自棄になった彼女は直之をも誘惑して関係を持った上で、番長との行為を告白する。

直之は番長に決闘を申し込み、無謀にもダイナマイトを使い、命を懸けて京子への気持を競う。引き分けに終わる中で、決死の覚悟をした二人の間には友情が芽生え、京子を挟んだ三人の新しい友人関係が前向きにスタートするのだった。……と書くと奇妙な結末に見えるかもしれない。過去に傷を持つ少女、優等生であることにコンプレックスを持つ少年、社会から疎外されて番長になった少年、彼らはいずれも孤立感に苛まれ暴走する。その閉塞感を、同じ高校生であるわたしには共有できるものがあった。

若い読者の集合場所であったキネマ旬報読者の映画評欄で、「学生 23 歳」の土田啓三はこの映画をこう評している。「心に深い傷みを持つ若者同士の、どうしようもないやけっぱちじみた行動の中に、すがすがしい青春の和解を、浮かび上がらせてくれました」（キネマ旬報 70 年 12 月上旬号　抜粋）この評言は、当時のわたしたち若者の胸に響いた。「どうしようもないやけっぱちじみた行動」に走ったり、そうしたいのにできないでいたりする者にとって、行くところまで行った末に同じ境遇の同世代と心を通じ合わせることのできた彼らは、うらやましい存在に思えたのだ。

●等身大の青春像――『高校生番長』

実は『深夜放送』は『高校生番長』シリーズの 3 作目である。このシリーズは一貫して閉塞感に鬱屈する若者たちの性的面あるいは暴力面での暴走とそこからの到達する救いを描き、特に高校生の共感を集めた。

最初の作品は『高校生番長』（70 帯盛迪彦　脚・須崎勝弥）だった。

全日制と夜間定時制が併設されている高校の昼間の女生徒・美穂（南美川洋子）は、自分の席を夜間に使っている未知の生徒宛に友達になりましょうと書いた手紙を机の中に入れておくが、その相手は夜間の番長・健太（小野川公三郎）だった。昼間のお嬢さんのいい気なひとりよがりさ、とせせら笑い、封筒の中に自分の陰毛を入れた返事をよこす。

クラス皆が注目する中で封を切った美穂は中身を見て一旦は驚くものの少しも負けておらず、「お返しに君のをくれ」との意地悪な要求に黒犬の毛を入れた封筒で応え、やり返す。しかし彼女のことが好きな優等生・弘人（小倉一郎）は収まらず、親友である昼間の番長・勇治（篠田三郎）と一緒に夜間の教室に殴り込むが、多勢に無勢で返り討ちに遭ってしまう。

その折、弘人は夜間の不良少女・妙子（八並映子）に救われ、彼女から誘われるままに関係を結んでしまう。思わぬ形で初体験をしたことに動揺する彼はそれ以来欲望に悩まされ続け、とうとう痴漢まがいの行為をしでかして学校中から軽蔑の目で見られるようになる。

弘人の仇を討とうと勇治は妙子をつけ狙うが、間違えて夜間の真面目な生徒ゆき（成瀬亜紀子）を襲い強姦してしまった。人違いに気付き後悔してももう遅く、学校に知られ査問委員会にかけられて退学を覚悟する。ところが、ゆきは彼を許し、合意の上だったと証言してかばい通す。

今度は健太が収まらず勇治に決闘を挑み、昼間夜間双方の番長グループによる岸壁での全面対決になろうとする。そこへ、ゆき、美穂、妙子ら女生徒たちが駆けつけて停めに入り、両者は結局和解するのだった。

かばい通してくれる思いやりにうたれた勇治はゆきを本当に好きになり、彼女もそれに応える。このカップルだけでなく、対立という形で互いが関わっていくうちに昼間と夜間の生徒各々が通じ合うものを感じていた。それゆえ、きっかけさえあれば両者はあっさり仲良くなれるのだった。登場人物全員が手を取り合って横一列になり波止場を駆けていく姿にエンドマークがかぶる心地よい幕切れだ。

ここでは、当時無名の若い俳優たちがそのまま自身の青春と重ね合わせるかのように登場人物を演じてみせ、現実の高校生活を髣髴とさせる等身大の青春像が描き出された。性欲に駆り立てられた小倉一郎（当時 18 歳）＝弘人が校内の女子トイレに忍び込んで見つかる場面は、ことに記憶に残る。皮肉にも大好きな美穂に「誰かいる！」と発見され、隠れている扉の外を大勢に取り囲まれて出るに出られず身をすくめている。そこへ教師をしている彼の姉が来て、中にいるのが弟だとは思いもよらず扉をこじ開けようとする。必死に扉を押さえる弘人だが、力尽き、とうとう皆の前に引き出される。その瞬間のやるせないみじめさが、余すところなく伝わってきた。

また、成瀬亜紀子＝ゆきは、強姦事件の査問委員会の席上、お互いに好きでやったことだときっぱり言い切る。孤児である彼女の面倒を見ている修道院の院長が唖然とし、「破門です！」と叫ぶのもものかは、やり過ぎたことを悔いている勇治を救う。修道院の体面ばかりを云々する院長より彼女の方がよほど「聖女」だ。追放も恐れず言い切る姿は、りりしく美しい。

小野川公三郎＝健太にしても篠田三郎＝勇治にしても「番長」とはいいながら非行ばかり重ねているわけではない。健太は集団就職で上京した小さな自動車修理屋の住み込み工員で、よく働いて主人夫婦から息子同様に可愛がられている。勇治だって、ごく普通の勉強やスポーツに打ち込む高校生だ。彼らは、暴力の力でなく度胸や人間的魅力で校内のリーダー格になっている。規則に基づいた選挙による生徒会長などより、もっと自然な形で同級生の信頼を集めているのである。

●みっともなさの中の切実なリアリティ――『高校生番長　棒立て遊び』

第 2 作『高校生番長　棒立て遊び』（70 岡崎明　脚・須崎勝弥）では、「棒立て遊び」なる性遊戯が取り上げられ題名にまでなっているものの、その実、描かれているのは高校生たちのナイーヴな心情である。

柔道部のエース力哉（篠田三郎）は、大学への推薦入学が予定されているため日常行動を規制されている。乱行を重ねるボクシング部崩れの宇佐美（若倉慶）一派の横暴に対抗する役割を期待されても耐えて眼をつぶるしかない。そのためガールフレンドの京子（南美川洋子）からまで「偽善者！」となじられる有様だ。

それでも大学進学という夢のために我慢し続けている彼の胸の裡を理解してくれるのは応援団団長の大作（小野川公三郎）だけだ。一見硬派の彼にも光代（八並映子）というガールフレンドがおり、彼女と二人して力哉を励まし京子との間を取り持ってやる。

ところが、退学になった不良少女ひろみ（八代順子）が興味本位で力哉に近づいてくる。隠れてストリップに行ったのを目撃された弱みで彼女を自室に入れた力哉は、誘惑に負け襲いかかった瞬間を、ちょうど訪ねてきた京子に目撃されてしまう。絶望した京子は、ふらふらと宇佐美たちの誘いに乗ってしまい、彼らの毒牙にかかる。

それを知った力哉は、ついに怒りを爆発させた。推薦入学取り消しを恐れず戦いを挑み、好きな女の子を自分の過失から追い込み、守ってやれなかった情けなさを噛みしめながら向かっていく。相手を存分に叩きのめした後も自己嫌悪は全く収まらず、自殺する決心でオートバイに跨る。そこへ京子が追いすがり、必死で止めた。力哉は抱きついてくる彼女に対し欲望を感じてしまい、抱きしめてその場で結ばれる。死にたい気持はいつの間にか雲散霧消していた。

なんともみっともない結末だが、このみっともなさには切実なリアリティが感じられた。もともと自殺の意志はそれほど確固たるものではなく、若さゆえの一時的激情のようなものだ。だから、ガールフレンドから許され、そのうえ身体の結びつきを得たならば、すぐに生きる気持へと転じてしまう。この正直さが高校生ならではの姿と言えた。

わたし自身、中学 2 年のときに自殺を図った経験がある。読書や友達との将棋に耽って成績が急落し、親から厳しく叱責され本や将棋だけでなく勉強以外の一切を厳禁され、勉強漬けで生きていても仕方ないと絶望してガス管を咥えたのである。ガスを吸っているうちに子どもの頃からの楽しいことやいろんな人たちとの思い出が蘇り、思いとどまってガス栓を閉めたからこそ、こうやって生きている。

ただ、その後は一度として死のうと思ったことはない。親に隠れて本を読み、映画館へ行き、高校 3 年生になると麻雀やパチンコにも興じていた。わたしの死にたいという気持など一時的な激情でしかなく、たいした決意ではなかった。結局は、いろんなカッコ悪い行いをしながら「リア充」とは程遠い冴えない高校生活を送っていく。それは、『高校生番長』の登場人物たちと大して変わっていなかった。

そんな強い共感を、わたしは『高校生番長　棒立て遊び』評で次のように書いている。

【またしても”生きる”映画だ。自殺はやめて、オートバイを押して帰る主人公たち。死を思いとどまった原因が、性欲を感じたため、なんていうカッコ悪さ。セックスに対する考え方の古風さ。それでいて明日だけをみつめる若さ。

自分たちなりのモラルを創り上げる中で、主人公たちはそれぞれ、喜び、悩み、苦しみ、誤解し、失敗する。そして、新人の岡崎明監督ら作者たちは、登場するすべての若者をやさしい目で描きとる。不良もズベ公も、偽善優等生も、みんな許して、明日をみつめるチャンスを与えてくれる。

帯盛迪彦監督の『高校生番長』あたりから、大映のこの路線は明らかに変質をとげたようだ。小野川公三郎、篠田三郎、八並映子、成瀬亜紀子といった新しいスターたちを得て、大映青春映画はみごとに花ひらいた。ぼくたちが見るべき、ぼくたちの映画ができあがった。ところが。

あまりにもひどい題名だ。前作（註・『高校生番長』）がよかったから期待して、見に出かけたものの、繁華街の大通り、映画館に入るとき、さすがにためらってしまった。新聞には、この作品に出演した女優が題名を口にできなかった、という話が載っていた。

まるでエロ性典もの扱いだ。予告編の文句”欲求不満のオトナたちに送る”。ぼくたちの若さを、おとなの、汚い情欲にクマどられた目で見られるのは、ガマンできない。若い主人公たちの失敗や誤解に、客席のおとなたちは大いに笑った。そんなシーン、ぼくはただ、ジンとして涙が出た。

内容とはウラハラの、こんな題名や宣伝のために、このさわやかな傑作が、ほんとうにこの映画を見るべき若者たちの目にとまらないのは、残念というより、悲しいことだ。

そしてこれは、ある意味で日本映画全体に対して言うことのできる傾向ではないだろうか。】（キネマ旬報 70 年 11 月上旬号）

●強力な青春スターの不在ゆえのフレッシュな魅力

『高校生番長』シリーズを担当したのは、68 年に『ある女子高医の記録　初体験』でデビューし高校生ものを連発してきた帯盛迪彦と『棒立て遊び』でデビューした岡崎明という大映では新進の監督だった。それが、『深夜放送』に続く最終第 4 作『高校生番長　ズベ公正統派』（70 田中重雄　脚・須崎勝弥）は、監督歴 40 年近い大ベテラン監督がメガホンを取ることになる。

しかしこれが、還暦過ぎの監督の手になるものと思えないほど若々しい勢いを感じさせる。受験一辺倒の高校で従順に飼い慣らされた生徒たちの中にあって番長（小野川公三郎）と女番長（八並映子）が反旗を翻す話は、高校生たちが受験の重圧に喘いでいた時代を反映していたし、篠田三郎、若倉慶、松坂慶子らも含め、シリーズを支えてきた面々の躍動

がみずみずしかった。

『高校生番長』シリーズは、群を抜いたスターの存在しない集団青春ドラマだった。単独のヒーローやヒロインが設定されず、多数の登場人物がそれぞれそれなりの個性を持ち組み合わさる。当時の大映に単独で主演のできる強力な青春スターが不在だったことが、無名の若手俳優の集団起用という苦肉の策を生んだ。撮影所所属の新人だけでなく、新劇の研究生、児童劇団の卒業組と、さまざまな経路から集められた面々が、多少演技は未熟でもフレッシュな個性を発揮した。

南美川洋子、八代順子、三笠すみれは従来からの大映専属俳優であり、篠田三郎、八並映子、成瀬亜紀子、若倉慶は「大映ニューフェース」出身の新人。児童劇団「ひまわり」からの松坂慶子は子役出身、小野川公三郎は新劇 NLT の研究生をしていた。彼らが中心となった高校生ものは、他に『十代の妊娠』（70 帯盛迪彦）、『タリラリラン高校生』（71 田中重雄）、『十七才の成人式』（71 岡崎明）がある。

●関根恵子の鮮烈な魅力

そうした状況の中にさっそうと登場してきたのが関根（現・高橋）恵子だった。中学 2 年生のときに大映のスチールカメラマンから見出されてスカウトされ、卒業と同時に 15 歳でいきなり主演デビューする。

デビュー作『高校生ブルース』（70 帯盛迪彦）は、柴田成人の小説「傷だらけの十六歳」を原作にして、15 歳の関根が裸身を披露することを売り物に「レモンセックスシリーズ」と銘打たれ最初から路線化を前提にされた鳴り物入りの作品である。篠田三郎、八並映子、成瀬亜紀子も出演はしているがあくまで脇役で、関根の演じる軽はずみな性行為で妊娠してしまう女子高生がヒロインだった。

相手の男子に腹部を踏みつけてもらって堕胎するというクライマックスがマスコミで大きな話題にもなった。相手役に起用されたのは子役出身の内田喜郎。内田もこのときまだ高校を中退した 16 歳だった。映画はヒットし話題になった割にはぎこちない出来で、作品的にはさほど印象に残らないものになったのは仕方ないところだったろう。

しかし、関根の人気は沸騰する。次の『おさな妻』（70 臼坂礼次郎）は富島健夫の人気ジュニア小説の映画化だ。同時期に競作で連続テレビドラマ化（主演・麻田ルミ）化されたのをはじめ、後に日活で『おさな妻』（80 白鳥信一）として原悦子主演で再映画化、83 年、87 年に単発テレビドラマ化されるなどしている問題作である。

関根が演じるのは親を失い孤独の身になった女子高生。生活のため学校を辞めてアルバイトする保育園で、父子家庭の園児の父と結婚する。ただこれは、青春映画というよりメロドラマであり、ヒットはしたものの関根恵子の魅力を十分に引き出したものとは言い難い。

それでも関根の人気は上がる一方で、デビュー後わずか半年の 71 年大映カレンダーでは最も注目される 1 月の顔として抜擢される。経営難に陥り、本社ビルを売却するなど苦境に喘いでいた大映は、彼女に会社の命運を賭けていたのである。次の主演作『新・高校生ブルース』（70 帯盛迪彦　脚・今子正義　原・柴田成人）は 71 年のお正月映画のメインとなり、併映作の渥美マリ主演『可愛い悪魔　いいものあげる』（70 井上芳夫）にもゲスト出演させるという売り出しぶりだった。

●純愛路線で本領を発揮した関根恵子――『新・高校生ブルース』

この『新・高校生ブルース』で、関根恵子は初めて真価を発揮した。原作は今回も柴田成人の小説で「京子ちゃん心配しないで」。関根の役は高校中の憧れのマドンナ京子ちゃん、前 2 作のように暗いキャラクターでなくのびのび明るくふるまう少女であることが、彼女の素直で伸びやかな資質を存分に生かしたのである。

話の方も男子 3 人組の集団がいい味を出して等身大の高校生青春映画となった。内田喜郎に加え、やはり子役出身の水谷豊、菅野直行が新顔として大映高校生ものに初登場する。今や『相棒』シリーズなどでカッコイイ中年を演じる水谷もまだ高校 3 年生で、実際に高校生年齢の面々が、この時代の冴えない男の子たちを活き活きと演じてみせる。彼らと関根の天真爛漫な魅力とが、みごとに噛み合った。

同級生 3 人組、健次（内田喜郎）、亘（菅野直行）、正樹（水谷豊）が「フラレタリヤ同盟」（学生運動でよく使われた「プロレタリア（労働者）」をもじって、振られてばかりいるカッコ悪い自分たちを称した）なるグループを結成し何とか童貞を捨てようと申し合わせるところから始まる。

とはいえ、平凡な高校生である彼らには難しいことだ。新宿の町で道行く女の子たちに声をかけても全く相手にされないし、おそるおそるトルコ風呂に入れば金が全く足らずに追い出される。

そこで身近な相手に目を向けることにし、健次は前から好きだった京子（関根恵子）、亘は英語の女教師、正樹は家の若いお手伝いさんに、とそれぞれ狙いをつけるが、これまたうまく行かない。彼女たちの前に出るとオドオドしてしまい、言い出すことさえできないていたらくだ。

大人の格好でキャバレーに出かけたときも、法外な勘定を請求されて狼狽する。三人の窮地を救ってくれたのは、生活を支えるためこの店で隠れてアルバイトをしていた同級生のサナエ（三笠すみれ）だった。これが縁となって亘はサナエと親しくなり、彼女の母親が内職で作っている色とりどりの造花が散乱している安アパートでついに結ばれる。

正樹も偶然知り合った年上の女性と一夜を共にして念願の初体験を果たし、残されたのは健次だけになった。だが彼は、自分は自分、と焦らないことにする。京子との交際の中

で、率直で健康的な彼女の気持に触れるにつけ、慌てて童貞を捨てるのにこだわるよりはじっくりと彼女との間で感情を育もうと決心するのだった。

亘とサナエが初めての契りを交わす場面、カメラは天井位置から直下に二人の抱き合う姿を捉える。裸電球に照らされ、畳一面の赤や黄の造花に埋もれるようにして互いを求め合う若さのほとばしりが美しい。その一方で、とりあえずプラトニックにやっていこうとする健次と京子も、ラストシーンではテニスコートで無心に球を追うときの白一色のスポーツウェアが清々しい。

まだ幼さの残る彼女にセックスの匂いをまとわせて売ろうとした前2作と違い、ここでは関根恵子のフレッシュで清純なイメージが強調され、われわれファンはその美しさや可憐さを改めて認識したのである。ここから、関根は純愛路線で本領を発揮し始める。

●死ぬことによって「生きた」二人――『高校生心中　純愛』

次の『高校生心中　純愛』（71 帯盛迪彦　脚・柴田久恵）は、題名通り純愛路線を決定づける一作である。『高校生番長』シリーズの常連・篠田三郎が相手役を務めた。

同級生である洋子（関根恵子）と由夫（篠田三郎）は自他共に認める仲のいいカップルだ。ところがある日、由夫の家でたいへんな事件が起きる。学生運動をしている兄に警察に勤める父が過激派に関する情報提供を強要しようとしたことから口論になり、争ううちに、はずみで兄が父を死なせてしまう。兄は親殺しとして逮捕され、元々身体の弱かった母は心痛のあまり急死してしまう。

あっという間に家族全部を失った由夫は学校を辞めて両親の郷里である信州の町へ行き、働いて兄の裁判費用を稼ぐことにする。洋子との仲も引き裂かれた。彼女の両親（加藤武、荒木道子）が、会社社長で参議院選挙出馬予定の父親の世間体を慮って由夫との交際を禁じたのだ。

それでも洋子は、なんとか親の目を盗んで新宿駅まで由夫を見送りに行く。夜のホームで別れを惜しむうち感情がこみあげ、発車の瞬間思い切って列車に飛び乗り一緒に旅立つ。この行動は一時の激情や同情からではない。由夫に対して感じる深い愛情を抑えきれなかったからに他ならない。

兄妹という触れ込みで部屋を借り、それぞれ仕事を見つけて働くままごとのような生活が始まった。慣れない暮らしだが幸せに満ちており、いつか洋子の両親の許しを得ようと健気に頑張ってやっていく。ひとつ部屋に寝ても肉体的に結びつくことはせず、手を繋ぎ合って眠りに就く。

しかし、そんな幸せも束の間のことだった。洋子の父が捜査願を出し、刑事がやってきて連れ戻されるばかりか、由夫が誘拐犯扱いされて逮捕される。二人の純粋な気持は誰にも全く理解してもらえず、またしても離ればなれにされてしまう。

疑いが晴れ東京のビル工事現場で働く由夫と、洋子がようやく再び会えたのは彼の兄を裁く公判の法廷だった。死刑判決を下された兄は控訴しようとせず、「俺を死なせてくれ」と呻くように言う。「お前は俺のために働いたりせずに、自分のために、あのかわいい子と生きろ」と言い残し、以後の面会を拒絶する。

いよいよ天涯孤独になった由夫を洋子は一所懸命励まし、もう一度勇気を出して二人の交際を許してもらおうと提案する。由夫は、自分のみじめな境遇に気後れしながらも意を決して彼女の父に将来洋子と結婚したいと申し出る。だが、殺人犯の弟が、貧乏人が、と罵られ、どうせ金目当てなんだろうと小切手で頬を張られる。にべもなくあしらわれて追い返され、洋子は自宅に軟禁されてしまった。

洋子の気を変えようと、母は金持ちの息子・仲本（若倉慶）との交際を勧める。もちろん彼女は乗らないのだが、外出のチャンスと考えてドライブの誘いを承諾する。由夫を思う本心を告白して謝り、彼のところへ行かせてほしいと懇願した。しかし、仲本は聞き入れるどころか激しく嫉妬し車の中で襲いかかる。洋子は抵抗し、揉み合ううち運転を誤って衝突事故を起こしてしまった。仲本は死亡し、運良く助かった洋子は茫然自失の状態で由夫の元へ転がり込む。

若い二人は身も心も追い詰められ、もう死ぬしかないと覚悟せざるを得なかった。思い出の信州へ行き、残り僅かな生の喜びを噛みしめるような短い時間を過ごした後、雪の山中に手を取り合って消えていく。

悲劇だ。けれども決して暗い物語ではない。洋子と由夫は、悲劇の主人公にしては明るすぎるくらい明るい。死に至る道行きでさえそうだ。山の神社でお宮参りの赤ん坊と一緒になると笑顔であやしてやる。自分たちの失われていく生をこれから成長していく赤ちゃんに託そうなどという悲壮な気持からではない。幸福な恋人同士なら当然そうするのと同じに、幼く可愛らしい存在を共に見ることで心和ませる、そんな感じでの行為だ。雪深い山林に入りいよいよ最期が近づいてからも全く涙を見せず、雪玉をぶつけ合ってはしゃぐ。カメラを持つ手振りで「はい、写すよ」と互いの写真の撮りっこの真似をするあたり、まるで遊びに来ているカップルのようだ。

冒頭、まだ普通の高校生だった頃の二人が学校帰りにカレー・ショップへ立ち寄る場面があり、声高に将来の夢や進学先の希望を語り合いカレーをもりもり食べる。死の直前になっても、そのときの健康そのものの彼らの様子と全然変わっていない。さまざまな厳しい試練を経ても彼らの意識はちっとも硬直化しておらず、あくまで柔軟な気持を保っているのだ。

信州で一緒に暮らすとき身体の関係を結ばないのは、意地を張っているのでも無理をしているのでもない。普通の高校生であるならば、ひとつ屋根の下に寝たからといって直ちにそうするものではない。これで当然だ。逆に最後、死しか選ぶ途はないと思い詰めたとき、自然と二人の身体は結ばれる。無理せず自然にやっていこうという考えからすれば、

これまた当然と言えよう。
　洋子の父に結婚の申し出をするところでは、これが欲しいんだろう、やるから失せろ、と五百万円（現在の貨幣価値なら一千万以上）の小切手で頬を叩かれる。こんなひどい侮辱に遭っても、由夫は一切暴力には訴えない。怒りに身を震わせるが、「失礼します」と踵を返し、去る。決して無法な行動には走らない（ちなみに、韓国純愛映画の代表作『ラブストーリー』［03 カク・チェヨン］で扱われる 70 年代初めの韓国での恋愛でも同じように父親が金で娘の相手の頬を叩く場面が登場するのには驚いた）。
　そんな二人だから、心中といっても自暴自棄になって死に急いだのとは違う。生きようと精一杯努力した末のやむを得ぬ死だ。それまでの彼らは、自分たちらしく生きていくためには何でもした。由夫はエンジニアの夢を捨て学校を辞めて働くし、二人が結ばれるためなら屈辱にも耐える。洋子も、何不自由ない生活に見向きもせず由夫と一緒にいようとする。
　彼らのする心中は、どんなことがあっても生きてなんとかやっていこうとする『高校生番長』シリーズの高校生たちの姿と何ら相反しない。由夫と洋子は、いわば死ぬことによって「生きた」とさえ思える。その点では、死への暴走とは正反対の方向を示しているのである。
　大学受験を終えた直後にこの映画を観たわたしは、次のような率直な感想を書いている。

【入試がうまくいかなかった一浪の受験生が予備校の屋上から飛び降り自殺した、という話をきいた。試験を終えて発表を待っている今のぼくには、身につまされる話だ。
　デビュー以来、一貫して現代の青春像を追いつづけてきた帯盛迪彦監督の新作「高校生心中・純愛」は、その話同様、実に身につまされる作品だった。
　涙が、とめどなく流れた。もう、恥かしいくらいに泣けてしまった。が、それは、いわゆる”泣かせ”に泣かされた涙ではなくて、もっと心の底からの、主人公たちと自分たちとが、ほとんど同一のように思えてくることからの話だ。
　関根恵子主演の純愛もの、というワクの中で、帯盛監督は、苦渋に満ちた若さを、みごとに描ききった”高校生シリーズ”のワクの中で、真の若者の姿をぼくたちに見せつづけてくれたこの作家としてはきわめて当然のことではあるけれども。
　関根恵子の家族が悪者ぞろい、というのは、おきまりの設定だとしても、篠田三郎の家庭が明るい平和な家庭だった、というのが鋭い。そんな家庭を一日のうちにメチャクチャにしたのは何なのか。恐らく父のせいでも兄のせいでもないのであって、それだけに主人公の苦しみは重い。その中で、彼が、関根恵子とのつながりに、生きるエネルギーの源を得ようとするのは当然だといえる。
　どんなことがあっても自殺してはいけない。生きてゆくべきだ、と思う。だが、この二人の死を、ぼくは非難できない。二人は、死ぬことによって、むしろ”生きた”といえる

のだ。つまり、この映画は、死ぬことを描いて、それを通して”生きる”ことをぼくたちに教える。ただのメロドラマでなしに、”生きる”映画たり得ているのだ。

最後に、永田さん、大映はこんな立派な映画を作っているのです。再建のためにがんばってください。】（キネマ旬報 71 年 5 月上旬号）

●死を向こうに控えたみずみずしい若さ――『遊び』

続く『樹氷悲歌（エレジー）』（71 湯浅憲明）は、山形県の上山温泉と蔵王を舞台にした恋愛悲話である。競馬の騎手になる夢が怪我で挫折し帰ってきた青年（篠田三郎）を幼なじみの少女（関根恵子）が励まし、友人たち（小野川公三郎、松坂慶子ら）の助力もあって立ち直らせる。手術を受け再び夢に挑戦するため青年が上京する前日、蔵王の雪山に登った彼らは遭難してしまい、少女は命を落とす。これは、残念ながらありきたりの悲劇ものにしかならなかった。

『高校生心中　純愛』と並ぶ関根恵子主演の秀作は、次の『遊び』（71 増村保造　脚・今子正義、伊藤昌洋　原・野坂昭如）である。これも男女が心中する話だ。ここにも、死ぬことによって「生きた」若者たちがいる。

少女（関根恵子）は 16 歳。中卒で町工場に就職し女子寮に入っている。トラックの運転手をしていた彼女の父（内田朝雄）は人身事故を起こして莫大な借金を背負い、それを残したまま飲んだくれて死んだ。カリエスで寝たきりの姉（小峯美栄子）の面倒を見るため働きに出られない母（杉山とく子）の内職稼ぎと少女の給料とで借金を返していかなければならない。

少年（大門正明）は 18 歳。町のチンピラでヤクザ組織の末端に所属している。父は蒸発し、屋台のおでん屋をしている母（根岸明美）は酒に溺れ、男をとっかえひっかえ引っ張り込んでいる。

少女はキャバレーに勤める工場の元同僚から稼ぎのいいことを聞き、母に渡す金欲しさに、どんな仕事かさえ知らぬまま自分もホステスになってみようと思う。話に聞いたキャバレーを探して盛り場をうろついていた彼女に声をかけたのが少年だった。兄貴分（蟹江敬三）に命じられ、初めてスケコマシをしようとしていたのだった。慣れない彼のぎこちない誘い方にも、無知で純真な少女は少しも疑いを持たない。言われるまま組織の巣窟となっている宿屋へと付いてくる。

連れ歩くうち、少年は彼女の素直さにうたれ、救いたいと思うようになった。このままでは兄貴分たちから犯されたあげくトルコ風呂に売り飛ばされるに決まっている。少年は、見張りの男を殴り倒し少女を連れて逃げた。

郊外の河畔にある小さなホテルに投宿し身を隠す。組織を裏切ったことの重大さに怯え、恐怖を忘れようとするかのように少年は少女を抱く。生まれて初めて異性から優しくされ、

うれしさでいっぱいの少女は、貧しく苦しい暮らしを振り切るかのように少年の胸に飛び込むのだった。

組織は二人を着々と追い詰めてきた。とても逃げ切れはしない。行き場を失った彼らは川辺に浮かぶ壊れかけた小舟を見つけ、それを押しながら川に入っていく。少年と少女は笑顔のまま、朝霧の立ちこめる中遠く彼方へと消えていった。「心中弁天島」という野坂昭如の原作小説の題名が示す通りの心中行だ。

『巨人と玩具』58、『華岡清洲の妻』67 などの文芸映画から『兵隊やくざ』65、『陸軍中野学校』66 といった娯楽映画まで大映を代表する巨匠・増村保造の作品だけあって芸達者なベテラン役者が脇を固め、関根恵子と大学在学中に所属していた新劇劇団から抜擢された新人・大門正明の若いコンビを支える。増村監督らしい強烈な描写が、貧困、暴力、セックスといった人生の陰の部分を真っ向から見つめ、力をこめてリアルに表現する。

かたやチンピラと女工員、かたや高校生同士と境遇は違っても、『遊び』の二人と『高校生心中　純愛』の二人とは同じような心の流れで心中に至る。双方共に追い詰められて死を選ぶのだが、彼らの姿からほとばしり出てくるのは、死の影ではなくみずみずしい若さのエネルギーなのである。

東京での大学生活を送り始めていたわたしは、それを感じとり、次のような映画評を書いている。

【危機にひんした大映から、またしても秀れた映画が生まれた。

少なくとも、ぼくが見ている「女体」以来の一連の作品、増村保造監督は、ヒロインたちに、セリフよりも、その肉体で芝居をさせてきた。浅丘ルリ子、渥美マリ、大谷直子――スクリーンの中で、ある何かが、彼女たちの体じゅうからほとばしり出ていた。

その”何か”とは、人間が生きていくエネルギー、といったものだ。ヒロインたちの若い肢体が躍動する中に、生きているというエネルギーの力感が感じられた。

関根恵子もまた、まさに、からだで芝居をしている。舌っ足らずな、不充分なセリフまわし。それとはウラハラな、おとなのように発達した肉体。関根恵子の少女は、そのからだいっぱいに、みずみずしい若さのエネルギーを体現している。

自堕落な生活の中で、最後の一線ともいうべき若い純粋さを守ろうと苦闘している大門正明の少年にとって、少女の若々しい”生きる”エネルギーは、この上もなく力づけられる応援なのだ。

はじめての夜、”お姉ちゃんの分まで抱いて！”という少女。ゆかたに残った、真っ赤な鮮やかな血。このとき、セックスは、なんと美しく感動的だろう。

貧困、暴力、セックスといった汚ならしいものを、まっこうから見つめ、リアルに力いっぱい描き出すことによって、それらを、さわやかで美しいものに昇華させている。

きれいごとだけを描かずに、ドロドロとした陰の部分をも見逃さない視点が、現代の青

春の実相を表現し得ている。
　解消まぢかのダイニチ系、がらすきの劇場のとなりは、「小さな恋のメロディ」、若い観客の長い行列がつづいていた。現代の日本の青春の息吹きを正確に伝えた作品が、若者たちに背を向けられる、ということは、どうしよもなく悲しい。】（キネマ旬報 71 年 11 月上旬号）

●大映青春映画の最終作――『成熟』

　『遊び』が公開されたのは 71 年 9 月、併映は松坂慶子の初主演作となる『夜の診察室』（71 帯盛迪彦）というお色気映画だ。大映は、経営の厳しさゆえ自社配給体制を放棄し、前年 5 月末に同じく苦しかった日活と共同で「ダイニチ映配」を形成していた。それも、日活のロマンポルノ路線への転換で崩壊し、この番組が最後のダイニチ映配作品となった。
　大映とて末期的状況であるのは変わらなかった。ダイニチ映配解体後は 10 月から再び自社配給で番組を組んだものの、それも 11 月末で力尽き、遂に 12 月倒産する。最後は経営もボロボロになり、1942 年以来の歴史を閉じた。
　とはいえわたしにとっては、そのお終いの 2 年間、大映は最も印象深い存在だった。高校生もの以外にも、『でんきくらげ』（70 増村保造）、『やくざ絶唱』（70 増村保造）、『喧嘩屋一代　どでかい奴』（70 池広一夫）、『君は海を見たか』（71 井上芳夫）、『秘録　長崎おんな牢』（71 太田昭和）、『狐のくれた赤ん坊』（71 三隅研次）、『片足のエース』（71 池広一夫）と佳作が連発されている。
　そして大映青春映画最終作は『成熟』（71 湯浅憲明）である。『樹氷悲歌』に続き山形県が舞台で、庄内平野の田園地帯に伝わるいくつかの古い祭を背景に、伝統的対立関係にある農業高校と水産高校の生徒たちが友情や恋を語り合う。話自体はさしたる新味のないものではあるが、2 つの高校の対立という図式は『高校生番長』シリーズを想起させ、観ていて切ない気持にさせられたのを覚えている。
　ラストシーン、生徒たちをかばって引責辞職し東京へ帰る教師の乗る列車を全員がオートバイに分乗して追いかけ、お別れの手を振って声の限り叫ぶ。少女たちは涙さえ浮かべている。関根恵子、篠田三郎、小野川公三郎、八並映子、菅野直行といった顔が揃うその姿は、そのまま、大映高校生もの青春映画が消えていくことへのサヨナラの気持を表しているように見えて仕方がなかった。
　そしてわたしは、彼らに対しこんなお別れの文章を書いている。

【関根恵子、篠田三郎、八並映子、小野川公三郎、菅野直行、この若者たちの出る映画を、もう、ぼくたちは見ることができないかもしれない。大映の危機は、もはや決定的なものになっているからだ。

湯浅憲明監督「成熟」。苦しい内情を物語る、地方とのタイアップ映画だ。たしかに、多くの欠陥を持っていて、すぐれた作品とはいいがたい。

けれども、この作品の中にも、やはり、大映青春映画の精神は生きている。たとえ、おとなたちと妥協してでも、カッコ悪くても、現状の中で、とにかく生きよう、せいいっぱい生きていこう、という精神だ。この映画の、バカバカしいほど楽天的なハッピーエンドぶりの中にも、それは感じられるのだ。たとえば「八月の濡れた砂」とは全く反対の地点にある生き方だ。

なまぬるく、老成した青春かもしれない。が、「八月の濡れた砂」が、ある種の青春の表象だとすれば、大映高校生シリーズは、もうひとつの青春を、まさしく表現していたといえるだろう。

日本映画の若々しいエネルギーは、なにも日活ニューアクションの中ばかりにあったのではない。大映青春映画の中にもイキイキと息づいていたのだ。そのエネルギーは、若い出演者たちの中に蓄積されて、田中重雄監督のような、監督業四十年に近い老匠にさえ、「高校生番長・ズベ公正統派」というみずみずしい映画を撮らせている。

「成熟」。若い出演者たちは、懸命に、東北弁を使いこなす努力をして、せいいっぱいの演技を画面にぶつけている。関根恵子のほおに涙が――大粒の涙が流れたとき、ぼくはいいようもなく悲しかった。大映青春映画は、もう見ることができないのだ。

――大映はつぶれちゃって、これからどうなるかわからないけど、関根恵子さんたち、がんばって！】

（キネマ旬報 71 年 12 月下旬号）